

## 木村力雄先生の職業訓練大学校時代のご業績

先生のご逝去のお知らせを受け、様々な思いが去来しますが、ただ残念と思うだけです。

教え子の一人として、木村力雄先生の職業訓練大学校時代の職業訓練界へのご業績を拙い文ですがご紹介したいと思います。

木村力雄先生の「職業訓練原理」の講義を最初に受け、そのレポート課題であった「他人指向型の職業訓練指導員について」に対して書いたレポートが縁となって、私は母校の職業訓練大学校に奉職することになったのですが、今日の私の存在は全く木村先生によってもたらされたのでした。お礼の言葉は言い尽くせません。

木村力雄先生の職業訓練大学校への

着任は 1967（昭和42）年4月 調査研究部研究員（兼）指導科助教授として

離任は 1975（昭和50）年3月 でした。

10年にも満たない在任期間に誠に大きな、そして貴重なお仕事をされたと思います。研究員として職業訓練に関する制度・理念の研究を、助教授として「職業訓練原理」の講義を担当されました。研究と講義により、職業訓練を理念的、理論的に考察する立場を明確にされ、職業訓練に対する精神的支柱を残されたのでした。

木村先生の職業訓練大学校時代の書き物としてのご業績は多くはありませんが、後に紹介しますように職業訓練界に残された功績には絶大なものがあります。書き物としては

1. 『「学制」に関する一考察—我が国において技能尊重の風潮は醸成しうるか—』、調査研究報告書 第13号、昭和42年度。
2. 『労働基準法における技能者養成規定の制定過程について』、調査研究資料第8号、昭和48年。
3. 『近代学校体制の成立と終焉の論理』、調査研究報告書第30号、昭和48年。
4. 『職業訓練指導員のための教育原理』、職業訓練大学校調査研究資料No. 12、昭和48年度版。  
が挙げられます。

2、3、4の研究が勤務末期に集中していますが、ようやく職業訓練の研究の新たな地平を切り開かれ始めた頃だったと思われまふ。例えば、1974年には日本教育学会の大会で「雇用保険法案における有給教育訓練休暇規定の史的背景について」を研究発表されたように、職業訓練の意義の発表にも尽くされました。

1の報告書の本論は明治5年に制定された「学制」が、アメリカのジェファーソンの思想の影響を受けている、という先生の学位論文でした。

当時の調査研究部は本館の3階で、歯車でも世界的に有名な東北大学からみえていた成

瀬政男校長の部屋とは廊下の反対側にあったのですが、成瀬校長から「学位論文」は進んでいますか、と廊下の中程のトイレで会うと毎回のごとく督促（激励）された、と懐かしく語っておられたときの笑顔が思い出されます。

ガラス研究室をベニヤ板で仕切った木村先生の研究室を訪ねると、三面の壁には学位論文に関連すると思われることをメモした紙切れを所狭しと貼った中で、にこやかに応対して下さったことを覚えています。

本報告書の副題にあるように、その「学制」の理念が職業訓練の課題である問題を学校の成立に遡って考察されたのでした。

2の調査研究資料は、「技能者養成規程」の制定過程の研究としては本資料よりも詳細な研究は無い、といえます。日本の企業内訓練の戦後の発足時の問題を検討するときの必読資料になっています。

3の報告書は1の続編とも言えるもので、「職業訓練は何故技能労働者の教育・訓練を中心に制度化されたのか」という冒頭の節に応える形式で職業訓練の意義の解明に焦点を置いて、以下、「学制」の課題とその否定される論理を整理しています。

4の資料は、「教育訓練原理」のテキストといえるものです。それまで、職業訓練の理論を整理した著作が無い下で、本書の公刊は極めて意義深いものです。

木村先生の「職業訓練原理」を最初に受けたのは私達4期生だったのですが、1年次の科目の担当者が途中で急逝され、4年次まで残っていたための（亡くなった先生には大変失礼ですが）“幸運”でした。文化系の講義は眠くなるのが工学系学生の常ですが、木村先生の講義でそのような者がいなかったように、居眠りする間を与えない、考えさせる情熱的な講義が今でも目に浮かびます。

私が2年間の職業訓練指導員を経た後に母校に戻ったときの「教育訓練原理」の講義は、私が受けた時とは異なり、次週の講義のための数枚の配布資料を配り、学生に事前の予習を可能にしていたのでした。「職業訓練原理」などのテキストは勿論、参考書も無く、かつワープロもなかった当時、この作業がいかに大変なことだったことかが、教員を担当してワープロを使えるようになって強く思い知らされるのでした。

数枚の資料は毎年改訂され、ある年からは冊子に纏めてやはり事前に配布されていました。その集大成が調査研究資料第12号です。これにより、一般大学よりも社会的に低くみられていた職業訓練大学校に入学した消沈した学生の意気を奮い立たせ、鼓舞したことは疑いありません。

このことは、教員の退任では最初で最後となった学生主催の「お別れ会」が二百数十名が入る001教室で開かれたましたが、その教室が学生がひしめき合って別れを惜しんでいたことが今でも思い出されます。

工学を選ぶのが有利であるにもかかわらず、先生の情熱に感じ入り、木村先生に卒業研究の指導を受ける学生が跡を絶ちませんでした。

中でも、木村先生が指導された山見豊さんの『昭和33年職業訓練法の成立過程』（調

査研究資料第2号、昭和47年)、貴村正さんの『徒弟学校の研究』(調査研究資料第3号、昭和47年)、沢和寿さんの「工場法の制定過程に関する研究—教育条項を中心に—」(『技能と技術』、1977年3号:卒業研究の概要)は私の研究にも度々利用させて戴いているだけではなく、高名な先生が引用・利用されており、その研究水準の高さを傍証していると思います。卒業研究が研究者の研究報告に引用されるということは木村先生の研究指導の卓抜さを示していると言えます。

なお、職業訓練大学校には木村先生の後と同じ東北大学出身の佐々木輝雄先生が指導科助教授(兼)調査研究部研究員として着任されていました。木村先生が離任された後、佐々木先生が教育学論を一手に引き受けておられました。ところがその佐々木先生は思いも掛けず急逝されたのです。佐々木先生の急逝に木村先生は真に動転されたことが窺われます。このことは、佐々木先生の追悼集である『佐々木輝雄 あえて困難な道を歩んだ人』への寄稿である『「佐々木さん」の謎」、及び佐々木輝雄職業教育論集第3巻『職業訓練の課題』(昭和62年、多摩出版)の解説「公共職業訓練の社会的存在理由—佐々木氏が探求の未出会ったもの—」に表れています。佐々木輝雄という戦友を早く喪ったことへの自戒の言葉が綴られています。職業訓練大学校を去られた後も職業訓練界のことを思っておられたことが伝わってくる追悼・解説です。

また、木村先生を招聘された宗像元介元調査研究部部長の追悼集『台風の高笑い』(1996年10月)には、宗像先生の俳句である「いささかの村起こし了え鶴帰る」をタイトルとして寄稿して下さいました。追悼文でも宗像先生の俳句を多用して宗像先生の職業訓練観を解かれています。その裏には木村先生ご自身の職業訓練界への重いが纏められているようでした。

職業訓練を尊重されていた教育学のご専門である木村先生が職業訓練大学校を去られた後、佐々木先生が先に急逝され、個人的には研究の在り方を考える時、木村先生ならどのように助言して下さるだろうか、といつも考えての模索でした。

未だまだご教授をいただきましたのですが、誠に残念で有り、しかしまた何時までも先生を当てにすることはではないのだ、と自認する一方、未だに自立していないことを自戒しています。

木村力雄先生は職業訓練界に魂を与え、職業訓練指導員として活躍することに意義と自負を抱いた学生を社会に送り出したことが、最も大きな功績であったと言えます。私もその一人と思えるようにこれからも生きていかねばならないと思っています。

先生の職業訓練大学校における講義での熱情、研究への姿勢によるご功績は何時までも残っています。

どうぞ安らかにお休み下さい。

合掌

2015年11月4日 田中 萬年